

「あいさつ」

お陰様で、「シネマ游人」は今号で、10号を迎えることになりました。振り返れば5年前に、脚本家の長田紀生氏との出会いがきっかけで、立ち上げた四日市発の映画同人誌ですが、地元の映画評論家をはじめ皆さまに背中を押していただき、なんとか区切りの号にこぎつけることが出来ました。編集部一同感謝の気持ちでいっぱいです。今号は記念号として、増頁で一部挿画をカラー化し、ちよつと贅沢をしてみました。ご高覧下さい。これからも今以上に「面白い」と言って読んでいただける映画誌をめざしてがんばりますのでよろしくお願ひします。

2020年9月 シネマ游人 編集部一同



特集Ⅰ あなたにとってお気に入りの

映画監督は誰？

今回の特集は、ズバリ映画監督です。映画という作品には、その監督の哲学や美学など、脳内そのものが込められています。手に汗握る物語を語る人、人間と人間とのぶつかり合いを映し出す人、社会やシステムの矛盾をあぶり出す人、奇抜な演出で観客を驚かさそうとする人。自分の好みにぴたりと合う監督作品に出会うことは、まさに至福の喜びです。

映画ファンにとって、多数の魅力的な監督の中から一人だけを選ぶということは、難しいと思います。だからこそ、それぞれの方の最もこだわりを持った部分を、原稿に刻み付けていただきました。さあ、あなたが選んだ監督は？

編集部

家城巳代治

吉村英夫

映画評論家

彼の戦争責任論はあまり知られていない。伊丹万作は、国民が「だまされるということ自体がすでに一つの悪である」と「被害者」である国民にまで反省を迫って波紋を広げた。同時期、家城は次のように自己批判をしている。「戦争が正しかったとしても、または正しくなかったとしても、私は正しくなかったのだ…。自由も、デモクラシーも、此の人間、此の自己がつくるのだ」。戦争で国民は犠牲をしいられたのに、なおも自分自身にムチを打つ家城。自己へのなんとという厳しさだろう。松竹の初代労働組合委員長となり、レッドパージで解雇。だが屈しなかった。代表作はすべて独立プロ。

『雲ながるる果てに』は「お国のために」散っていく特攻隊員の心情を、『異母兄弟』は高級将校の歪んだ愛国心と家庭での傲慢さを、『姉妹』は田舎の学校生活とその周辺の労働者を、…それらで家城は生真面目に、反戦反封建をうちに秘めて描きつづけた。家城の映画史的考察を映画史家は改めてやらねばならない。：「私の家城巳代治」とあえて言おう。

タル・ベーラ（ハンガリー）

井上静夫 同人誌主宰

映画は物語である。と同時に物語だけでは語り尽くせないのが映画である。タル・ベーラの映画には、画と音と人々、そして風景。つまり我々を取り巻くあらゆるものが詰まっている。

タル・ベーラはまた、こだわり続けることにブレなかった監督である。35ミリフィルム、モノクローム、長回し、そして揺るぎない世界観。これらにこだわり、単調で反復の多い運動によって形成される極端に長いカットによる映画空間がタル・ベーラの世界となった。

タル・ベーラのフィルムには空気の微妙な変化までが刻みつけられ、濃密で不穏な空気、圧倒的な質感が説明のいらない映画体験となる。類まれな映像美は映画が芸術であることを再認識させ、映画を観る誰もが「この映画空間にずっといたい」と思わずにはいられなくなる。

しかし残念なことに『ニーチェの馬』を最後にタル・ベーラの映画は観られなくなったのである。

イ・チャンドン（韓国）

水野圭次郎 むぎのえいが部

2018年の年の瀬にNHKで村上春樹の短編小説「納屋を焼く」をベースにした「バーニング」というドラマを観ました。その後、すぐに『バーニング劇場版』が公開されました。全体的に抑え気味のトーンなのですが、現代の韓国社会の光と影を見るようでとても興味をそそられました。特に謎めいた女性ヘミが夕日に照らされながら、服を脱ぎ捨て、自由になった鳥のように踊るシーンは、BGMのマイルス・デイビスの曲にとってもマッチしていて、その美しさに心を奪われました。

その後、イ監督の『ペーパーミニットキャンディー』『シークレットサンシャイン』『オアシス』、プロデュースした『私の少女』を立て続けに観ました。いずれも韓国社会の中で弱い立場である人たちが何かの弾みで人生を踏み外してしまった人たちを独特の視点で描いています。学生時代に民主化運動のリーダー的存在であったイ監督ならではの鋭い視線は、韓国社会のひずみや不条理を鮮やかに描き出し、観る者に深い感動を与えてくれます。

クアク・ジエヨン（韓国）

岩崎久美子 映画ファン

クアク・ジエヨン監督の感覚

クアク監督を意識していたわけではなく、好きな韓国映画を繰っていくと彼に行き着いた。邦画ではこんなことは無いのに何故かと調べてみると、脚本と原案も執筆しておりクアク色が深い為だった。

作品に共通するものは悲しみの中にある優しさ。特に『ラブストーリー』にはそんな感覚になる仕掛けがたくさんある。私などは一度では見つけきれずに、DVDを購入してしまつた程だ。そしてストーリーが情緒的だけでなく、音楽も美しい景色も合わせて心に残る。今でも曲を聞けば、ちゃんと場面が蘇る。

他にも『猟奇的な彼女』など話題になった作品もあるの
で、ぜひ映画好きな方に観ていただけたらと思う。

ケン・ローチ（英国）

衣斐 泰子 主婦

一人を挙げるのは難しいことですが、私はケン・ローチ監督にしたいと思います。

過去に撮った名作で人々の心にいつまでも残る人もあり、色褪せることはないでしょう。一方で今も新作を世に問い、今撮った映画が自分の代表作であるという姿勢の監督はケン・ローチだと思います。私が初めてその名を知った『ケス』（1969）以来一貫して弱者の側に立って発信し続けています。社会や狭くは家庭のなかにあっても一番無力で存在の不確かな者の味方として訴え続けているのです。

先日、テレビで83歳になった監督のインタビューと老夫妻の日常を紹介していました。世界がコロナ禍にあるなかで監督の最新作が時代を象徴していて深い、というナレーションだったかと思えます。ローチ監督は『ジョーカー』や『パラサイト』が時代を反映していて面白いと語りました。異質の作家・作品を高く評価するところにも監督の大ききさを感じ、最新作を早く観に行きたいと願っています。

ウーイーゴン

呉貽弓 (中国)

藤田 明 映画評論家

二度会えた呉監督

中国映画は私の積年のテーマの一つ。一般には第五世代監督以降なのだろうが、文革の波をかぶった第四世代や、戦前の巨匠たちへの関心の方がまさっていたと言えよう。

呉貽弓はその一人。『城南旧事』(1982年、邦題『北京の想い出』)に興を抱き、二度目の中国への旅の際、上海撮影所を訪れた。早くに私信を送ったが、返事が届いたのは出発前夜。『流亡大学』(1985年)のロケで上海を離れていて……と。もの柔らかで芯のある口調、夜七時すぎからの一時間。門を入れてすぐの建物の二階だった。のち香港映画『阮玲玉』にその階段が登場。偶然、清水晶さんと東京の地下鉄で顔を合わせた時、戦中にはあそこへよく行きましたよ、とも。

2012年、小津の戦跡をめぐったが、その折に再会できた。撮影所長から上海文学芸術連合会の会長に転じ、場所も新しいビルだった。足跡・シナリオ・作品研究から成る一冊をいただく。昨秋、81歳で亡くなった

クエンティン・タランティーノ (米国)

太田 義幸 通りすがりの映画好き

俺、この監督好きだぜ!

レンタルビデオ店で、手にしたビデオのパッケージにあった深作欣二監督の推薦文が「俺、この映画好きだぜ!」。映画は、タランティーノ監督の『レザボア・ドッグス』。タランティーノって誰?と思ったが、深作監督が好きだと言ふのならレンタル。面白さにぶっ飛んだねえ。それ以降、全作品を観ている。『パルプ・フィクション』も大好きだ。『デス・プルーフ』もたまりません。ただ、その後の、『ジヤンゴ』や『ヘイトフル・エイト』などではドカンとはこず、ちよつと私には違ってきたのかなあと思っていたところで観たのが『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』。終盤の展開にタランティーノの映画愛があふれ、彼が本当に映画を愛していることがガツンと伝わった。現実では実現できなかった夢物語を映画なら表現できるというこ、映画というものの力を示してくれて、観た後に幸せな想いを抱かせてくれたタランティーノはやっぱり好きだぜ!

大林宣彦

西松 優 日本映画愛好家

永遠なれ大林青春映画

大林宣彦監督は、自主映画の先駆者であり、CMディレクターとして名をあげ映画界に転じ、幅広いテーマで多くの優れた映画作品を残した人である。

その中でも私は『転校生』『さびしんぼう』『青春デンデケデケデケ』の青春三部作（私見）が好きで、特に『さびしんぼう』は私の生涯ベストテンにいろいろほどこ気に入っている。大人になる前に通過する多感で悩み多い高校生時代、尾道の風景を背景に、「別れの曲」の甘美な調べにのせて、やさしく愛情溢れる視線で男子高校生の成長を描くのである。主人公のつる恋の想い、母の青春（さびしんぼう）、寡黙な父の母への包容力等への共感と共に、ラストの意外な結末にうれしくなってくる。

この映画に感動し、私は親友を誘い尾道のロケ地と一緒に歩いた。親友は翌年若くして病死し最後の旅となった。私はこの映画の感動と親友との友情の証に、生まれた子どもにこの映画の主人公の名前をつけた。時代は変わっても人の心は変わらない。大林青春映画は永遠に残るだろう。

黒沢清

安井 文 謎の美女

ミニシアター通いのきつかけは黒沢清監督の『アカルイミライ』。オダギリジョーさんの映画初主演作を観たくて、隣のミニシアターへ足を向けたのが始まりだった。

よくわからないが面白かった。近所の映画館でハリウッド系エンタメ作品ばかり観ていた私は、ガツンと一発くらった。そして、黒沢清という映画監督を知った。

どこか廃墟じみた街で意思疎通出来ない人々が右往左往して、何か起こってもどこか他人事。取り返しつかないことになっていくのに、どこか妙に安堵している。作品はいつもそんな印象。よくわからないけどやっぱり面白い。好きな理由は説明できない。だけど、惹かれる理由はきつとある。それを探るために過去作品にあたり、時々著作を読んではオマージュ作品を探し、そしてまた、新作が発表され……。何度も繰り返すのに、好きな理由はまだわからない。

チャールズ・チャップリン(英国)

池村英子 津のナチュラリスト

ユーモアと皮肉の入り混じったチャップリンの映画はシンプルでわかりやすく、時を経ても色褪せない。『街の灯』『キッド』・・・チャップリンの映画には魂が込められている。私がチャップリンを好きなのは、弱者への愛が深くあたたかいことだ。そしてヒットラー時代の『独裁者』に見られる勇気と正義感だ。それはどこから来るのだろうか？チャップリンの母親のハンナは貧しさのあまり精神的な病気を患う。しかし、そんな中でも常に明るく振舞おうとした。チャップリンは「パントマイムに関する限り、最高の名人」「私の知っている中で最高にすばらしい女性」とし、母親を心から尊敬していた。入院生活の長い人だったが、最後はチャップリンと生活し、彼に看取られて、あの世に旅立つ。この母親こそ、チャップリンに深い愛情を注いだ人であり、チャップリン映画の源流だと私は思う、チャップリン、私は忘れない！！ 美しい映画、音楽、そしてあなたのことを。

松井久子

伊藤英子 津市文化協会理事

1946年生まれ。早稲田大学文学部演劇科卒業。雑誌ライターを経て、1979年俳優のプロダクション会社を設立。数多くの俳優のマネージメントを手がける。1985年エッセン・コミュニケーションを設立し、プロデューサーとして数多くのテレビ番組を企画制作した。1998年映画『ユキエ』を監督・公開。アルツハイマーの妻、夫婦をテーマとし、2002年『折り梅』は、夫の母との関係を描き、2010年には、イサム・ノグチの母『レオニ』も話題を呼んだ。これら3本の映画は、いずれも家族がテーマであり、女性の視点が満ちたものであった。これら上記の3本は、三重県男女共同参画センターと市町の共催による「三重県男女共同参画連携映画祭」で多くが上映された。その後、2014年ドキュメンタリー映画『何を怖れる』フェミニズムを生きた女たち』が公開された。三重県では、自主団体「男女共同参画みえネット」の主催でフレンテみえにおいて上野千鶴子教授の講話と共に上映され大好評であった。

松井久子監督は、その経歴が示すように、長年の経験を糧に、自分と向き合い、最もよく理解している世界を描いているという。(著書「松井久子の生きる力」より)だからこそ、見るものはその普遍性に共感するのである。

アラン・パーカー（英国）

保田與志彦

Mugi cafe オーナー／むぎの部活動！「えいが部」部長

私が最初に監督の作品に出逢ったのは、高校生の時に見た「バーディ」。鳥を愛する少年が、ベトナム戦争で心神喪失しながらも空を夢見る素敵な映画。今でも全面ブルーの映像が鮮明に残っています。マシュー・モディーンやニコラス・ケイジの初々しい演技と、観客を突き放す様なラストが印象的です。反して黒が印象の「エンゼルハート」。ミッキー・ロークが主演のハードボイルト作品ですが、ズルズルと沼地にはまって行つて抜け出せない感覚描写に監督の技量を感じます。衝撃のラストも見ものです。

遺作となつてしまつた「ライフ・オブ・デービッド・ゲイル」も死刑問題を、アカデミー賞も受賞した「ミッドナイトエクспレス」では犯罪者の人権問題を、「ミシシッピバーニング」では人種差別をと。個性俳優と共に社会を挑発する様に作品を撮り続けた、アラン・パーカー監督に合掌。（2020年7月31日没）

デイヴィッド・リンチ（米国）

西川真周

フリーター 人間観察家

僕はときどき不可解な人と遭遇することがある。例えば、仕事の帰り道で、女装したおじさんが自転車に乗って追い越しざまにパンツを見せてきたことがあった。それはほんの一瞬のことだ。訳がわからなかったのだが、おじさんの履いていたゴリゴリのボクサーパンツだけは今でも鮮明に覚えてい

ている。とにかく、そういう強烈で不可解な人に出会うと、日常の風景が一気に歪んでいき、不可逆的に異質なものに変化させられていく。そういう奇妙な出来事によって日常が異化していく感覚が僕は病的に好きだ。

映画という表現方法においてその特異な感覚を与えてくれるのが、デイヴィッド・リンチ監督だ。彼の映像作品には必ず「不可解な人」が登場する。登場人物のほとんど全員が何かしらの不可解な要素を持っていて、それに対する説明が一切ないまま、白昼夢のような物語が展開されていく。彼は説明のできないものをそのまま説明のできない形で提示してくれる稀有な監督だ。

行定勲

林久登 スタッフ

1人を挙げるとなると難しいが、現役で活躍中の行定勲を挙げておこう。何といっても2001年の宮藤官とタッグを組んだ『GO』は衝撃だった。在日朝鮮人と日本の女の恋愛ものでありながら、ステレオタイプな物語ではなく、民族間のしがらみを突き抜けた、人間同士のぶつかり合いに胸を熱くしたものだ。彼はこれで一躍注目され、大手から声がかかり『世界の中心で：』『北の零年』（2004）の大作を次々と撮っているがこれはつまらない。2013年になって、1人の多情な女を巡る複数の男の愛憎劇を描いた『つやのよる』は主人公の女は姿を見せないという異色の作品。そして2017年になると、日活ロマンポルノ再起動企画に参加し、『ジムノペディ』という当時のポルノとは一味違う男と女の絡みを撮る。翌年には、劇中に突撃インタビューを入れてベタな青春群像劇では見られない若者の生の気持ち伝わってくる作品『リバーズ・エッジ』を発表する。既成の概念を取っ払った彼の作品は、いつ見ても新鮮でインパクトがある。

ステイバーン・スピルバーグ（米国）

森 次男 スタッフ

社会人になって初めて衝撃を受けた洋画作品はステイバーン・スピルバーグ監督の『ジョーズ』。すでに半世紀近く経過しているが、この映画を超える映画には出会えていない。現在の監督はほとんどデジタル撮影だが、彼はフィルム撮影をしているのも魅力のひとつ。

その後に『激突』という作品に出会った。この作品は1台の乗用車が大型トレーラに背後から執拗にあおられるという令和の時代にも通用するストーリー展開。車のバックミラー越しに重要なことを描写したり、光に反射するフロントガラスをクローズアップし、トレーラの運転手の顔をラストでも見せないという斬新な描写で最後まで釘付けにされた。彼の作品はその後『E.T』『未知との遭遇』『インディーズ・ジョーズ』のシリーズなどメガヒット作品が多いが、すべての作品にはアクション、ロマンス、サスペンス、コメディ等様々な要素が盛り込まれているのが魅力で、世界最高のヒットメーカーだと思う。

クエンティン・タランティーノ (米国) 村上暁 スタッフ

映画館よりライブハウスが好きだった頃、ゴキゲンなロケンローを楽しめる映画として、タランティーノ作品に出合った。

『レザボア・ドッグス』のオープニング、「Little Green Bag」が流れる中を黒ネクタイ、スーツの男たちが歩く。かっちょいい！これ以降確実に、黒ネクタイ、スーツでステージに立つバンドマンが増えた。ラジオから流れる「Stuck in the Middle with You」でノリノリになるミスターブロンド。その後の残虐行為とのギャップにしばれた。

『パルプ・フィクション』では、ヴィンセントとミアのツイストシーンと、帰宅したミアがオープンリールデッキから音楽を流すシーンの二つが素晴らしい。音楽への深い愛情が、俳優の演技を通して伝わってくる。

『レス・プルーフ』のラスト。スタント女子の華麗なパンチ、キックでカートラッセルがKOされた後すかさず流れる「Chick Habit」。ボーカルのギャル声がたまらない。

極めつけは、日本が舞台の『キル・ビル1』。青葉屋で、東京アングラシーンのガレージバンド「The 5.6.7.8's」が登場。バンド選択のセンスが最高すぎる！

増村保造 中村藤生 スタッフ

敬愛する監督 1924～1986

増村の出生は1924年8月。学生時代が太平洋戦争と重なっている。東京大学法学部を卒業、エリート官僚の路を外し、大映に助監督として入社。アルバイト感覚で割と自由な生活が持てたようだ。法学部を卒業後、文学部哲学科へ学士入学している。大映では溝口健二、市川崑監督の助監督について後、ネオ・リアリズム最盛期にイタリ留学(国立映画実験センター)、映画へ踏み込む貴重な2年を過ごした。

思い入れある監督を一人選ぶ。増村映画との出会いは、若尾文子主演『清作の妻』から始まった。初期からあくことなく追求してきた「個人」。最後期の『大地の子守歌』1976、『曾根崎心中』1978の二作が増村らしい。ストーリー性は単純だが原作世界の時代性を伴う強い自由・自己の希求が深く強く表現されていて飽きない。江戸時代は元禄の上方、大坂町民文化勃興のもと、人気を博した近松門左衛門の浄瑠璃に心情を発見し映画化した。当初、梶芽衣子が宇崎竜童とコンビで主演映画を増村に撮って欲しいと持ち込んだのがきっかけだ。その訳を知りたいものだ。